

## カムルチー等による野鳥への影響

NPO法人田んぼ 船橋玲二

生物多様性を損なう原因の一つに外来種による在来種の圧迫がある。アメリカザリガニは水草を激減させ、水草で産卵する昆虫類に大きなダメージを与えている。ため池に生息するアメリカザリガニは捕食者が存在することで個体数が抑制されることから、カムルチー等の外来肉食魚も温存してはどうかとの意見も見られる。しかし、過去に肉食捕食者が在来種を絶滅させた例は数多いので点検が必要と考えた。今回はカムルチー等の外来肉食魚類が鳥類に及ぼす影響について情報収集を試みた。

筆者自身、カムルチーがバンの幼鳥を補食した場面に遭遇したことがある。ため池のほぼ中央を泳いでいたバンの幼鳥は、水中から突如現れたカムルチーにひと呑みにされ姿を消した。当時、予想だにできなかった展開に非常に驚いたことを覚えているが、写真や動画の撮影といった一瞬の出来事を記録する手立ては持ち合わせていなかった。

各地の野鳥愛好家からも類似の観察情報があり、カルガモの幼鳥等が補食されていた。しかし、いざ記録となると論文等は皆無であった。そのような中、曾我部ら(2014)はオオクチバスの胃からカモ類の幼鳥を見つけたと報告していた。台南市官田水雉生態教育園区の李氏からは、台湾にはカムルチーと同属のタイワンドジョウが生息し、浮葉植物の上で繁殖するレンカクの幼鳥を捕食するとの情報が得られた。大型の肉食魚類は生息する場が自然分布か移入による分布かにかかわらず、幼鳥期から水面を利用するタイプの水鳥を捕食することがわかる。日本ではカルガモ、バン、カイツブリといった種が該当する。鳥類の保全には繁殖・渡り・越冬のそれぞれのステージを改善していく必要があり、繁殖環境は最重要である。環境改変、餌不足、気候変動等様々な原因で多くの鳥類が減少しており、繁殖阻害要因は一つでも排除するにこしたことはない。

外来種による捕食が鳥類に影響した例は、国内だけでも沖縄本島に導入したマングースがヤンバルクイナを、三宅島に導入したニホンイタチがアカコッコを捕食し脅威になったことなどいくつもの例がある。捕食者は導入された先で最も手に入りやすい獲物を狩るため、最初のターゲットがいなくなれば当然のように別の獲物を狙うこととなる。種と種の関係性は常に流動的なため、一時期安定したと思われていても、いつのまにか様子が一変している可能性があるため、監視を続けなければならない。その労力が恒久的にかけられるかも含めて検討が必要である。

ところで、日本の鳥類の世界では最近個体数が大幅に回復してきた種のひとつにシジュウカラガンがある。この種もそのたどった歴史を見ると外来種問題との因縁がある。シジュウカラガンは江戸期にはガン類の中で最も個体数の多い種の一つであったことが仙台藩の狩猟記録からもわかっているが、明治以降、その数を急激に減らし、絶滅したと考えられた時期もあった。日本は1875年にロシアと樺太千島交換条約を締結し、千島列島が日

本領となった。当時は世界的な毛皮ブームにあり、千島列島ではアリューシャン列島からキツネを導入して養殖が始まった。千島列島がシジュウカラガンの主要な繁殖地だったためにあつという間に個体数が減少したのである。キツネ導入元のベーリング島（アリューシャン列島の西端）の養殖場では餌不足を補うためにセントローレンス島からネズミを導入していたが、そのネズミはエキノコックスを保有していた。千島列島へはキツネの導入とともにエキノコックスが侵入した。戦後、千島列島からキツネが持ち込まれることはなかったようだが、根室地方から上陸を果たし、北海道全体へと拡大した。北海道への上陸は流水原因説もある。もし、セントローレンス島から汚染されたネズミを導入しなければ、北海道にまでエキノコックスが広がることはなかったのである。

外来種の問題は大型種か小型種かを問わず、思いもよらなかった影響が出る 경우가多く、私たちはそれらを完全に元に戻す手段を持っていない。外来種に対しては慎重であるべきというのが筆者の見解である。